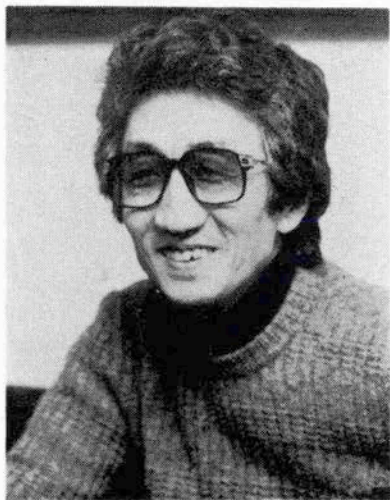


☆私の意見

# 神戸に アート スペースを

石阪 春生

△洋画家△



今、絵を描く人がどんどん増えてきています。ですから神戸に美術ギャラリーのような物がかなりのスペースとしてあってもおもしろいと思います。アトリエとくっついているとか、つまり美術館ではなく、あくまでもギャラリー的発想で、物を並べる、創るといった原点をひくくめた空間を創るわけです。今、絵を描く人はアマチュアもプロも合わせてたくさんの人達がいらっしやるわけですが、まず絵を描く所がもの凄く限られており、アトリエをもつという事はたいへんなことなんです。だから、人工島に、美術・工芸用のアトリエを大々的に造ったらどうかと思うんです。そこで茶わんを創ってもいいし、布を染めてもいいし、絵を描いてもいいわけです。そしてその中に、できた物を並べるギャラリーを造るわけです。そうすると不思議な広場ができあがると思います。土地とかの問題も、全部市の方におんぶしてもらうのではなくて、市民サイドでもいいから土地を提供してもらって、営業をやっていけばいいわけです。そうすると、この「アトリエエマシジョン」を借りる人はけっこう多いと思いますね。

そしてアトリエエマシジョンの中央にギャラリーとして広いスペースがあるわけで、自然とアートスペースが生まれてきますし、そしてその横に教える所を創れば学校にもなる、という風に、拡がってゆく考え方もあると思うんです。様々な価値観を持つ人間がそこに集まって、バラバラに物を創れば今度それが一つの神戸の物創り屋の思想みたいなものができてくるんじゃないかと思えます。

たとえば人工島にアトリエ群を造り、それを少しでも安く貸して物を創っている人たちを集め、それぞれの立場で創られた物を並べれば、それはギャラリーになり、楽しい空間になって、素晴らしいアートスペースが生まれるわけです。それが神戸の一つの文化的風土になって拡がっていくのではないのでしょうか。



# ★月刊神戸っ子25周年記念文化賞／第15回受賞者発表

## ブルー・メール賞

副賞各拾万円  
新谷瑠紀制作  
海の女神ブロンズ像

神戸の新鮮なイメージ創りをつづけて来ました月刊神戸っ子は、この三月号で創刊25周年を迎えました。これもひとえに皆さま方の暖かいご支援の賜と厚くお礼を申しあげます。

小誌は創刊10周年を機に、神戸の文化を推進するために文化賞「ブルー・メール（青い海）賞」を設定いたしました。本年、第15回を迎え、各部門別に選考会を開き、左記の4人の方と「グループ」に賞をお贈りすることになりました。副賞には地元企業のご協力により各部門の受賞者に賞金拾万円と記念品（彫刻家新谷瑠紀氏による海の女神のブロンズ像）が授与できることとなり、心から感謝の意を表します。

これからも地域社会の中から世界に通じる文化を育みたく、力いっぱい努力してまいりたいと思います。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

△授賞式は4月10日（木）午後6時から神戸ポートピアホテルで行います▽

### □文 学 部 門

選考委員

伊勢田史郎・君本 昌久・安水 稔和



武田 信明

△現代詩▽

△君本 昌久▽

新鮮なミュージックに時めく若々しい詩人が出現したことを  
歎びたい。夢と現実をじわじわと詩の「彼方」におきかえ、  
抽象の川から掬いあげている。とりわけ新しい定型を発芽  
させているのは美事だといふはかない。

### □音 楽 部 門

選考委員

柴田 仁・小石 忠男・出谷 啓



延原 武春

△指揮▽

△小石 忠男▽

延原武春氏は日本テレマン協会の創立者として、わが国  
のロック音楽振興に寄与し、その名声はいまや国際的に  
も高い。昨年もパッハ生誕三百年に際し、日本代表として  
東独で演奏した。受賞はおそそきた感がある。

□美術部門

選考委員

赤根 和生・伊藤 誠・草野 拓郎



石川 晴久

△洋画▽

△伊藤 誠▽

比較的、前衛意識旺盛な活カタイプを、多く推挙してきた本賞だが、今回は、冷静な沈黙タイプの抒情作家を登場させたといえようか。永い目で、着実な前進を見守りたい新人である。

□舞台芸術部門

選考委員

佐野 漣箕・名生 昭雄・岡田 美代



松本 尙蒔

△邦舞▽

△岡田 美代▽

この方の受賞を、私たちは何年も前から待っていた。もう一息。あと一息と、力を入れて応援していた。昨年の舞台は、真にその期待に応えてくれた。ともすれば、形やわざに美を求めがちな世界から転じて、こころを見せてくれた。その努力を称賛して、今後の精進を祈る。

□ファッション部門

選考委員

福富 芳美・森本 泰好・藤本ハルミ・小泉美喜子



コウベ・フアツシヨンのモデリスト△K・F・M▽

△代表・藤本ハルミ▽

一人一人は強い個性を持ちながらK・F・Mというグループになると見事なまとまりを見せる。そして例年の発表会は今では他に例を見ないすばらしいものとして、全国的にも評価されており、ファッション都市神戸を代表する会である。

△福富 芳美▽

★ブルー・メール賞協賛企業

- 株式会社 淡路 屋角南商事株式会社
- 財団法人 井植記念会 株式会社 太陽神戸銀行
- UCC 上島珈琲本社 田崎真珠株式会社
- 株式会社 大月真珠 日本たばこ産業株式会社
- カネテツデリカフーズ株式会社 株式会社 ノーリツ
- 神戸地下街株式会社 バンドー化学株式会社
- 株式会社 神戸風月堂 株式会社 山勝真珠
- 株式会社 シヤルレ 株式会社 ワールド
- 神栄石野証券株式会社

△社名50音順▽

□私と神戸っ子

小磯良平画伯を  
訪ねて

北光線から  
生まれる  
小磯芸術



——本誌ものの3月号で創刊25周年を迎えます。創刊した年はちょうど先生がパリから帰国された時で、5月号の表紙に「サクレクール寺院」のデッサンを初めて使わせていただきました。

「ああ、あの丸い屋根の寺院ですね。もう25年にもなりま

すか。最初はずっとデッサンで新年号だけカラーでした」  
——当時アトリエへ何うと画伯は猛烈なスピードで描いておられましたね。毎月、オリジナルで描いて頂きましたが目の前でそれこそ20分位で仕上げられていましたね。

「私がまだ50代後半ですから元気でしたね(笑)近頃は少々老人ボケ気味ですよ(笑)」

——学園紛争の頃から編集部が画伯の絵を撮影させて頂いているわけですが、個人で所蔵されている方から「ぜひ表紙に使ってほしい」という申し出があってその方と交流が生まれた、ということもありました。

「編集部もあちこち探し回って大変なことだね」

——「神戸っ子」という名は元神戸大丸の塩路義孝さんや現モロゾフ会長の葛野友太郎さん、亡くなられた二代目の永田良介さんたちが、昭和9年に創られた「神戸っ子」から頂いたものなんです。

「確かその時も藤田嗣治らと頼まれて私も描きました。『神戸っ子』というのはハイカラ

で良い名前だね」

——その神戸も随分と様変わりしましたが、古くから神戸に住まわれている画伯としてはいかがですか。

「昔、住んでいた北野町界限が大変変わったね。あの街が若い人でいっぱいになるとは想像もつかなかったですよ。静かな北野町でなくなったのは、残念な気もするが——」

——2月には神戸で久々に大きな展覧会が催され、多くのファンが喜んでいきます。

「東京、神戸、福岡と三カ所で催され、未公開作品も30点ほど出品された。松阪屋の最終日には東京へ出て、皆と久しぶりに旧交を暖めてきました」

——毎朝、次女の邦子さんやお孫さんのももさんとの散策が日課で、午前10時にはモデルのお嬢さんがアトリエを訪れ画伯はキャンバスに向かう。

北向きに位置したアトリエは天井が高く、大きな窓から柔らかな日射しが差し込む。

この北光線の中から、数々の小磯芸術が誕生しているのである。

## □随想／私と神戸っ子 高度情報化社会

にこそ、  
生の人間の  
息づかいを：

米花 稔

△神戸大学名誉教授▽



とわからないですよね。

このごろ個性的なものが大変大切になってきています。誰がやっても同じでは駄目です。組織の時代、情報化の時代だからこそ、一方では個性的なものを、つまり、ホロニックー全体と個一の関係が重要なんです。“神戸っ子”には、そのあたりを期待しますし、それを実践していると  
思います。

神戸は、いろんな世代間の交流、地域の交流、いろんな分野の交流ができる街です。しかし、そのことがついマンネリになりがちで、時々刺激として、違った空気、新しい空気を持ち込んで欲しい。百四十万人の街として固まってきて、人の出入りも少なくなってきました。もっとどんどん外に出て行って、外から見た神戸というものを知ること  
も必要です。

とにかく、神戸というところは、大阪や京都に比べて、いろんな人間が簡単に集まり接触できる街。だからこそ、“神戸っ子”にそのための手助けを頑張ってやって欲しい。

私と雑誌“神戸っ子”との  
お付き合いは、古い話なので  
一体いつからで、どういうき  
っかけであったかなどはほと  
んど忘れてしまいましたね。  
それはさておき、私が“神  
戸っ子”にいつも感心するこ  
ころは、モダニズムを表面に  
押し出してやっていきながら  
その根底には必ず古典主義が  
基本となっていることです。  
クラシックをバックグラウン  
ドにしているのが特徴であ  
り、良い点だと思っております。  
神戸という街は常に、古い  
ものを新しい眼で見すえてい  
く土地柄です。そうした眼を  
“神戸っ子”も持ち備えてい  
る気がするのです。

してきたこと、またこれから  
実行していくこと、それは、  
インターフェイスという言葉  
で表わせますね。つまり、接  
触面という意味かな。いろん  
な分野のインターフェイスを  
いつも設定してゆく役割を、  
“神戸っ子”はやっているの  
ではないですか。それは、雑  
誌だけに限らず、文学賞など  
の賞関係や、パーティなどに  
より、人と人とのジョイント  
役を果たしている。このこと  
が、現在の高度情報化社会に  
最も肝心なことで、これから  
ますますコンピュータ時代  
になっていくと、生の人間の  
息づかいがわかるような接触  
が重要になってきます。本当  
のことは、顔を合わせてない

## □随想／私と神戸っ子 神戸には

### 人間らしい 魂がある

ジャン・メルオー

△灘カトリック教会司祭△



私と雑誌「神戸っ子」とのお付き合いはもう24年になります。当時私はまだ36歳ぐらいで、体型ももっとスマートだったのですが…。

「神戸っ子」との出会いには私にとっては人間的にとっても有難いことでした。神戸に住んでいる人たちの生活、その目的、生きがいというものがよく理解できるようになりましたし、他所から来た私にとってリズムに乗った生活ができるようになりました。

神戸に住んでいても、神戸の人たちを見ていても、その人が何を考え、何を望んでいるのかということを知ることがいらないことにはそれは人形を相手にしているのと同じこ

とです。ただ姿を見るだけというのでは人間との出会いはいえません。

「神戸っ子」は、人との出会いの中から生まれてくる人間形成というものに大きな役割をもたらしてくれます。つまりそれは人間の心を生み出すこと、ひいては、街の魂を生み出すことになります。

今、神戸は全国的にも人気がありますが、それは、ただ海があり山があるというかたちだけのものでなく、神戸には人間らしい魂があるからだと思います。人間の態度、歩み、希望に魅力があるので「神戸っ子」はそのための最も効果的な働きをしてくれているように思えます。

私が神戸で暮らして、日々の生活での人との出会いの中に、とても人間らしい、家庭的なやさしさを感じることができるのは、そこに街の魂があるからこそにじみ出てくるものだと思います。

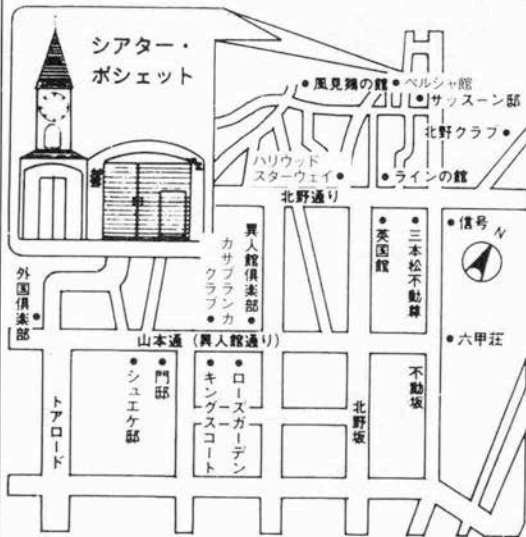
今の「神戸っ子」はそういう意味でも私にとって満足いくものです。ただこれから望むこととして、先走りせず無理をしない活動をして欲しいということですね。街は生きていきますので、神戸自体の生活の動きに合わせて、何か新しい形で活動をした方がよければ、その時その時によく考えながらやっていけばよいと思います。常に人々の動きの中に含まれている精神、その人の良さ、そして努力、そういういったものを搜しだしてきて、記事として誌面に表現できれば素晴らしいことです。私達にはそういったことが随分励ましになるものです。

「神戸っ子」にしても私達の仕事にしても、すぐに実を結ぶものではありません。結果は後からついてくるものですから、あせらずじっくりと良い活動を続けて欲しい。

実験交流サロン

# シアター・ポシェット 3月の公演

- 1日(土) モーツァルトクラブコンサート
- 8日(土) ひとりオペラ
- 15日(土) 朗読の会・言の葉コンサート
- 23日(日) 日仏映画祭
- 29日(土) } シアターファントマ
- 30日(日) }



### ★シアター利用のご案内

- 曜日、時間／土、日曜日(通常) A.M.10:00—P.M.8:00
- 費用／ホール設備の使用無料。光熱、空調、管理費のみ実費
- 付帯設備／ランドピアノ・エレクトーン・録音、音響機器、ミキサー、照明コントローラー・テープレコーダー、マイク、映写機等
- お申し込み、お問い合わせ  
まごう前センター街東南角、さんちか入口  
〒650 神戸市中央区三宮町1丁目5-1 住友銀行ビル6F  
佐本小児歯科 佐本 進 ☎ 331-6302~3

オリエンタルホテルの

# 感動ウェディング

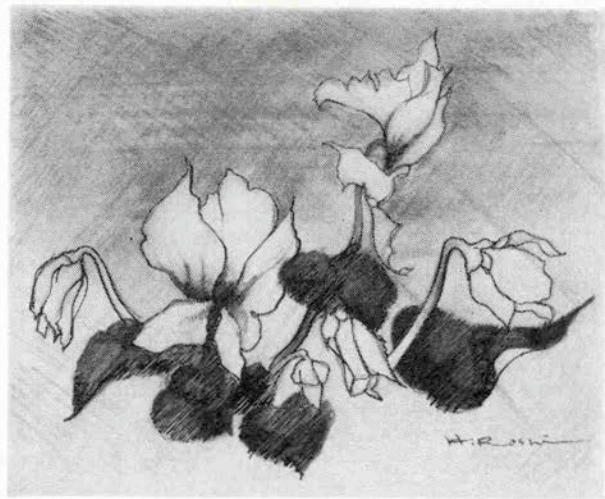


いざな  
浪漫への誘い  
それが華燭の典  
クライマックスを迎えた  
恋人たちがいま、まぶしい



## オリエンタルホテル

神戸市中央区京町25 ☎ (078) 331-8111



『神戸っ子』が二十五周年を迎えたという。じつは私が江戸川乱歩賞をもらって、まがりなりにも作家としてのスタートを切ったのが二十五年前であったのだ。『神戸っ子』と私の作家年齢は同年ということになる。同年といえば、ほぼ同じ時期に同じ体験をすることが多く、一種の戦友のようなかんじがある。

一九二四年（大正十三年）はネズミの年で、一昨年、還暦を迎えた。世話をする人がいて、合同還暦というのを、生田神社会館で祝っていたのだ。神戸のチューター会は、画家の中西勝、竹田洋太郎、カモカのおっちゃん、『神戸っ子』編

■月刊神戸っ子25周年記念  
エッセイ〔I〕

# 二十五年の 雑感

陳舜臣（作家）

絵／松本宏（画家）

集長のお兄さんの小泉氏といったメンバーであり、記念のネクタイ、そして田辺聖子さんから花をいただいたのである。こうした会は世話をする人がいないと、なかなかできないものだ。東京でもネズミ会というのが、不定期的（というよりは発作的）にひらかれたが、最近、数年は声がかかってこない。

東京のネズミ会は、吉行淳之介、黒岩重吾、川上宗薫、画家の永田力の諸氏がメンバーであり、毎日新聞の星野慶栄氏が世話人であった。星野氏は外語の一年後輩だから、竹田洋太郎や赤尾兜子と同期のはずである。私は早生まれなので、同期



よりも一期の下の人たちに同年が多い。星野氏はマメな人で、こんな世話をよくしてくれた。会場はきまって銀座の「まり花」であった。というのも、この小さなバーは、地下にあり、まるでネズミの巣のかんじであったからだ。ネズミどもが会をひらくにはもってこいの場所であろう。狭いわりに、北の富士だとか梶原一騎だとか、大きい人がよく出入りして、凄味もあつたのである。

「まり花」のイクちゃんは、「魔里」にいた女性である。銀座に進出する前の「魔里」は新宿にあって、マリちゃんが一人でやっていた。梶山季之が週刊文春にトップを書いていたところで、トップ屋のスタッフがたむろする場所であつた。新幹線がまだ営業する前、私は試乗させてもらったことがある。新大阪駅は工事中で、足をすべらせ、捻挫してしまった。東京に着くとひどく痛むので、とりあえず新宿の「魔里」へ行き、エアサロンプスを吹きかけてもらうと、嘘のように治つた。そのマリちゃんが出世(?)して、銀座の店を出したとき、宮崎から家出(だろうと思う)してきたイクちゃんがいっただのである。そして何年かたつて、彼女も出世して、狭いながらも銀座の地下にバーをひらいた。すなわちネズミの巣である。文壇のネズミは、ほかに安部公房や吉本隆明などの諸氏もいるが、どうしたわけか星野氏は声をかけない。難しそうなのは敬遠したのであろう。その世話役の星野氏が、酔っ払って階段から落ち体調を崩し、入退院をくり返した挙句、他界してしまった。もう七、八年も前のことである。そのあと、面倒な世話役をつとめる人がなく、ネズミ会としての会合はなくなつた。ときどき何匹かの

ネズミが、偶然顔をあわせて、「あれ、もういぢどやろうじゃないですか」と言い合うのだが、まだ実現していない。そのうちに、川上宗薫さんが欠けてしまった。

同年といえ、越路吹雪さんが、私と同年同日の生まれであつた。コーちゃんの歌をきいたり、舞台をテレビでみていると、「彼女もがんばっている。同じ日に生まれたおれもがんばらなくちゃ」と、励まされたものである。彼女の死は、私にとって大きなショックであつた。神戸のクラブ「中川」のヌーちゃんは、私より一日だけ早く生まれた。店はやめたが、相かわらず元気なので同年の私はほっとする。

このあいだ、芥川・直木賞選考委員会で、久しぶりに吉行、黒岩の両ネズミに会つた。吉行さんは白内障の手術の話、黒岩さんは東京の大学にはいったお嬢さんの話で、どうも話題の質が変わつたようにおもう。ネズミ会のことろの話題は、もうすこし艶っぽかつたはずである。

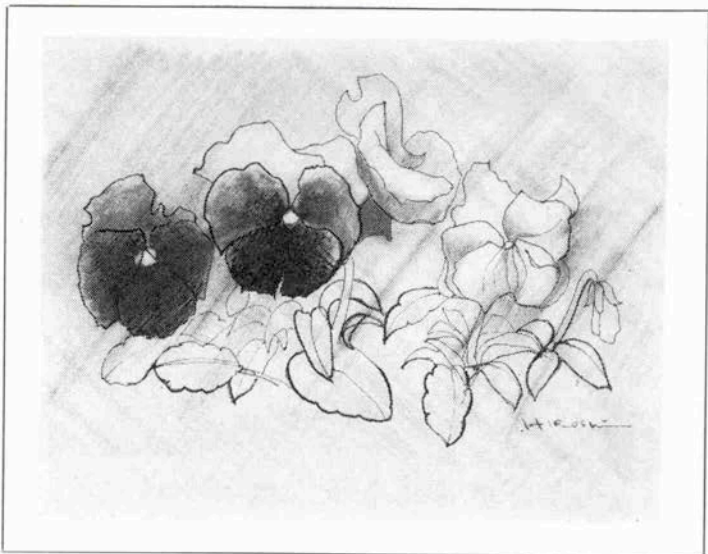
なんだかんだと言いながら二十五年——四分の一世紀が経過した。「神戸っ子」もタウン誌として、みごとに仕事をしてくている。戦友としてお祝いを申し上げたい。私のほうも、ことし個人全集が講談社から出る。二段組みでぎっしり詰め、毎巻平均千六百枚分を収め、ぜんぶで二十七巻ときました。それでも私の全作品の六割ていどであるという。二十五年の収獲だが、全集をまとめることを、私はつぎの出発と考えている。ゴールではなく、スタートラインである。また「神戸っ子」といっしょに走り出す。ときどき声をかけ合つて元気で行きましよう。

■月刊神戸つ子25周年記念  
エッセイ〔Ⅱ〕

# 神戸風情

池上忠治 〈神戸大学教授〉

絵／松本宏 〈画家〉



何の地縁血縁関係もなく全く偶然のようなことから神戸で働らくようになってから、いつしか二十年近くなる。長いような短かいような変な気分である。子供のころ野球をやるようになってからずっと阪神ファンだが（梶岡、土井垣、藤村など）これは専門領域の選択や就職と関係がない。

最初は西宮市、次いで大阪府下に住んだ。六甲で働きながらも神戸市民への道はなかなか遠かった。山本通などという身分不相応なところに住んでいるのは、ここ数年のことである。大学にも新幹線にも近く、伊丹の空港まで遠くないのも有難い。山本通には国際的な活躍をしている教官を

優先的に住まわせろ、という意見が学内にあったらしいが、及ばずながら私も専門の性質からして多少は国際的な仕事をしているつもりである。

近ごろ三宮が少しきれいになったかと思う。阪急三宮駅の北側を整備したりトリアロードの歩道の敷石を統一したりしたせいであろうか。珍らしい鳥が家の前後の木々にとまりに來たり深夜ボウアーンと汽笛がきこえてきたりするのには今に始まったことではないが、風情があることには変わりがない。

ただ欲を言えば、ポートピアやユニヴァシアドといったことなしには整備が進まなかったらしい

点が残念だし、敷石も人工のものよりは天然のものであるほうが望ましい。むろん、行政上、財政上の種々の理由をすべて無視しての感想である。

ただ私は県からも市からも月給はもらっていないので、両者いずれとも多少の関係はありながら両者を等分に、そして傍観者の冷たさをもって、見ている。たとえば海をあまり埋めたててはしくなく、神戸沖空港などはなくいい。

神戸市のあちこちを詳しく知っていると到底言えないにして、三宮・元町の近辺にはいろんな意味で愛着がある。知人も多いし、知らない店でも適当においしく飲食のできるところが多いのは大いに楽しい。洋食の幅の広さなどは同じ県庁所在地でも仙台、名古屋、広島などと比べて断然ちがうわけで、懐工合と相談しながら適当にそうした店を楽しむことができる。

むろん安くておいしい店ばかりではない。おいしいが高い、高いうえにまずい、まずいくせに気取っているなど、いろいろである。だが、こうしたことはひとつひとつ自分の身体感覚を総合的に働かせて覚えてゆくしかない。

うまいまずいを言えば、たとえばビール。今の日本で売られているパドワイザーもハイネケンもそれぞれの本国で飲んだ同じものより味が落ちると私は思う。これは神戸に直接的な責任のないことだが、異人館のようなものは良きにつけ悪きにつけ責任がある。異人館通りを楽しむ人々が沢山いて何の不都合もないが、この辺はひどく物価が高いのが嫌だし、異人館なるものも結局は折衷的で、私は面白いと思わない。フランス料理にも似て非なるものがある。逆に世界的な水準をゆ

くのは恐らく洋菓子であろう。似て非なるものもそれが日本では一応本物として通るのだということになれば人様のビジネス（商売？）に文句をつけねばならぬいわれはないかもしれず、だが近ごろお酒も甘いものも控えろと医者に言われているのが残念である。

もう一点思うのは、神戸に書店が少なく、古本屋は京都や大阪のその充実ぶりに遠く及ばないことである。これは町（都会）の歴史の長短と切っても切れぬ関係がある。公共の図書館の充実度についても、たぶん事情は同じであろう。

たまたま昨年、明治三五年発行のお厚い官庁刊行物を探した。大学になく、県と市といずれの図書館にもない。国会図書館にあることは判っているが、遠すぎる。結局、大阪の中之島図書館にあり、コピーもすぐに取れて大いに助かった。

図書館といえば数年前、県の図書館から私の著書を寄付してほしいという手紙がきた。雑文集のようなもので値段は千二百円。県内居住者の著書を集めており、できれば寄付をという、丁重な文面だった。むろん一冊お送りしたのだが、他方で県立図書館なるものはこれでいいのだろうかという感じもした。

念のために書いておくが、私は喜んで寄付をした。千二百円が惜しいわけではない。敷石も洋菓子も図書館も、文化度を、あるいは文化の成熟度を計るバロメーターである。そして、図書館が行政的に厚遇されていないことは県においても私の奉職する大学においても同じらしい。山本通や北野町には本屋らしい本屋さえない。私としては大変に複雑な思いである。

# オーストラリアン

## ジャズ・コネクション

末広 光夫 (音楽プロデューサー)

米国人というのは、自国のジャズをどうみているのだろうか。昨年の夏、オレゴン州のジャズ・フェスティバルをみて疑問を持った。早い話、たとえば神戸に在住する米国人たち、彼らの口からジャズの話を知らない。はつきりいって、いま古き佳き時代のジャズをこよなく愛し、その伝統をひき継ぎようとしているのは、米国人よりも、むしろ欧州人をはじめ他国の人とみているくらいだ。

神戸にパトリック・ドナヒューというオーストラリアンがいる。スイスに本社をもつ外資系の会社に勤めをもつ傍ら、塩屋クラブの会長の要職にもある人だが、ご夫婦そろって熱烈なジャズ愛好家として知られている。お互いにジャズの好みが合うもので、しばしば塩屋のお宅に伺っては、ジャズを聴き、時間を忘れて語り合える良き友人である。

彼は毎年十二月になると、長期間クリスマス休暇をとってオーストラリアに帰国している。羨ましいと思うのは、その長い休暇だけではない。暮れの二十六日から六日間、オーストラリアで恒例のジャズ・コンベンションがあるときいているからだ。話をきけば「神戸ジャズ・ストリート」と似たシステムだが、その規模は何倍も大きいとい

うし、ぜひ一度様子をみてみたい気になっていたところ、昨年の暮れパトリックから「来ないか。一切の面倒はみるから……」と、願ってもない話が降って湧いた。決めた！日本人としては初めての参加だということも気持ちを募らせたし、なによりも未知なるオーストラリアのジャズにふれる喜びで一杯。まさにキャプテン・クックの心地だった。

「オーストラリアン・ジャズ・コンベンション」これが正式の名称だが、いま流行のフェスティバルにしないとこがよい。歴史も四十年ときいて驚いたが、参加バンド百四十八グループ、これがすべてオーストラリアのバンドというから信じられない。事実数えてみた、偽りはない。このイベントで面白いことは、オリンピックと同じように毎年開催地が変わることだ。今回はメルボルンから少し大陸に入ったバララッタという街、ここは昔ゴールド・ラッシュでわきかえったところだそうだが、街のたたずまいはアメリカの西部の街よりもはるかに美しい。

三十五ドル(四千五百円)のアドミッションを払うと、各会場に自由に入れるワッペンがもらえる仕組みは「神戸ジャズ・ストリート」と同じだ。それにしても六日間通しで、しかも朝十時から深



オーストラリアの一流ジャズメンと筆者（左端）



パトリック・ドナヒュー（左側）と秋に来神するグレアム・ベル（ベルの自宅）

夜までジャズが楽しめるというのは、どう考えても安い。スポンサーつきでもない。仕事柄そのへの探りをいれてみたら、なんのことはない出演者はプロ、アマチュアを含めて、すべてノーギャランティ。そればかりか聴く側と同じように入場料を払った上に、交通費から滞在費、食事代まで自弁というから、ちょっと日本では考えられない。ただジャズを演奏したいがために、ミュージシャンどうしが年に一度の再会を楽しみに集まる。まさにコンベンションの名の通りである。

この国には独自の音楽も伝統もない。すべて外国の音楽に依存している世界でも珍しい国である。ジャズにしてもアメリカの伝統を踏まえて忠実にしているところがいい。

プログラムの中には、街頭のパレードもあり、ピクニックもある。聴く側からみればジャズのお祭りだが、筋の通った内容のプログラムも用意するところは惜しい。

帰国して、すっかりオーストラリア党になった私。「あちらではネ。演奏者以上に聴き手が熱心で真面目なんだ。そう神戸のジャズ・ファンのようにネ」と。会う人ごとに話している昨今。これに乗せられてか。今年のコンベンションには、龍野のキング・クレゾール・ジャズ・バンドが、そして来年は大阪のニューオリンズ・ラスカルズもオーストラリアに遠征する話もかたまりつつある。一方、オーストラリアからも、この秋の「神戸ジャズ・ストリート」に、この国最高のジャズピアニスト、グレアム・ベル（ピアノ）が来日する話が決まって、今後ますますオーストラリアン・ジャズ・コネクションは深まりそう。



正統派のおいしさ  
ラインゴールド

まろやかなチョコレートのなかに、  
ナッツを彩り豊かに散りばめました。  
甘く、香ばしい味わいが、ひとときを  
華やかに演出します。



ユ-ハイム

1986

FASHION  
GLASSES

CREATIVE & FASHIONABLE

その風のように微笑む  
すると涼しい光がこぼれて  
見つめているとまぶしいほど



神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表  
三宮店・さんちかローザアベニュー ☎(391)1874~5

〈その76〉

## 日本のド真中

檀上重光 〈神戸市立博物館・副館長〉

ちようど九十年前の明治二十九年三月二十日、日本郵船の土佐丸（五、七八九ト）が神戸港を出航

して欧州へ向かいました。これが戦前、あまりにも有名だった欧州航路の第一船です。地中海からロンドンを経て、アントワープ（ベルギー）を最終寄港地にしていきます。それまで日欧間を往復してい

たのは外国船ばかりで、この時以降、日本船による定期航路となつたわけです。

神戸は欧州航路、横浜は米国航路の基点でした。欧米の最新知識を求めて、政財界人、技術者、そして芸術家ら文化人が神戸港を後にし、そして幾多の哀歎と、抱えきれないほどの情報を持って帰国

しました。神戸と横浜は輸出入貿易だけでなく、情報基地として日本の中心でした。

年代がさかのぼりますが、神戸駅の開業は明治七年五月十一日で、関西初の官営鉄道の終端駅としてスタートしました。路線は神戸

―大阪間で、東京（新橋）―横浜間の開業に

遅れること一年八カ月です。着工は同じ明治三年ですが、鉄橋やトンネルなど難工事が多くて遅れたようです。

案外知られていませんが、当時の関西鉄道

局は神戸駅にあって、大阪出張所も管轄しています。さらに、明治十四年から十九年までは鉄道本局も神戸に設けられ、鉄道最高の指揮統率の大部分は神戸から出されました。

この時期、明治新政府の熱い視線は、神戸と横浜の二つの開港場にくぎ付けでした。工部省所管官設事業の興業費の半分を、鉄道に集中投下しています。まだ連結していない横浜―京都間のことは眼中にありません。まず両港を整えて、一日も早く世界市場への参加をの一念でした。つまり当時の新政府にとって、日本のド真中は東京でも京都でもなく神戸と横浜の二港でした。

はるか平安の昔、わずか半年という短命ながら、福原京が帝都だったことはいまもすまい。歴史には、瞬間風速的首都にすぎないのですから。しかしいろんな面で神戸が日本のド真中だったことがある諸事実は、覚えていてもいいことでしょう。

「歴史は繰り返す」という言葉があり、振り子運動は確かに存在するようです。これからの神戸は、どういう面で日本のド真中になり得るか。まだどこかに巣食っている二流意識を払拭し、よりよい神戸の創造に知恵をしぼりたいと思います。



神戸の文化活動を担う神戸市立博物館

★月刊神戸っ子創刊25周年記念インタビュー



少年時代を過ごした神戸の思い出を語る井深名誉会長

# 21世紀の神戸は右脳の発想で

井深 大  
いぶか まさる

大〱ソニー株式会社名誉会長〱

聞き手・小泉 康夫〱本誌編集長〱

井深名誉会長は少年時代を神戸で過ごされておられます。今日は、まず、神戸時代の思い出からお話しをお願いしたいと思います。

アマチュア無線に夢中だった神戸一中時代

井深 私が数えて三歳のときに父が亡くなりました。父が亡くなってから、母が東京で女子大の幼稚園の先生をしていたので、母と二人で小学校の初めまで東京で住んでいたのです。さらに祖父母が愛知県の安城に住んでいたのも、そこへ移りました。そこで母が再婚しまして、嫁いだ先が神戸だったんです。

ところが私はおいてけぼりを喰らひまして、休みの日

にだけ神戸へ行っただけです。だから神戸がものすごく羨やましかったですね。それで五年生の初めだったかなあ、神戸へ来て入学したのが諏訪山小学校だったんです。

諏訪山小学校を卒業されたのが大正十年三月。それから一中（県立神戸第一中学校）へ入られていますね。井深 そうです。考えてみますと、諏訪山小学校には、

たった一年半しか在学しなかったのに、非常に強い印象がたくさん残っているような気がします。これは、多くの同級生と一緒に神戸一中に入り、ずっとその交りが連続しているの、諏訪山校と一中との区切りがはっきりしないままで両方の印象が重なっているからかも知れませんね。



——神戸一中の頃のお住まいはどちらですか。

井深 諏訪山です。私の義理の父が山下汽船の海務課長をやっていたのですが、間もなく辞め、海事審判補佐をやり諏訪山に住んでいたのです。諏訪山温泉の上の方に家があったんです。北野の通りをずっと歩いて、一中へ通いました。当時の一中は、布引から海岸へ行く途中にありました。現在の神戸高校とは場所が全然別です。

——じゃ、随分の道りだったんですね。

井深 あの頃は、今とは違って、電車とかバスがまだなかった。だから歩くより仕方がなかったんです。

義理の父はえらく厳しい人で、毎朝、起きてから釜山か市草山まで歩いて来ないと朝めしを食べさせてもらえなかった。だから毎朝行ったものです。それから学校へ行きました。随分と早く起きたものですね(笑)。だから足は今でも丈夫ですよ。

——神戸一中は厳しい教育で今なお有名ですが、当時の思い出としてどのようなことが残っておられますか。

井深 神戸一中は、当時、日本で最も入学試験の難しい学校の一つといわれていましたので、諏訪山校ではずい分としごかれました。それも今は楽しい思い出ですが、中学へ入ってからはその反動で勉強をしなくなった(笑)。

その頃、アマチュア無線を始めましてね。許可制度のなかったときですね。大正年代ですから。無線ばかりやっていたから勉強は一つもしなかった(笑)。当時ハムをやっている人は、日本にそんなに居なかったですね。

——ハムを始めましたっけといえますよ。

井深 友だちが居ましてね。笠原功一さんといまして後にソニーの常務になった人ですけど、その人は面白い人で、日本のハムの開拓者ですね。関西学院の卒業ですが、その人の指導で無線を始めました。

始めた理由がちょっと変わっていました。愛知県にいたときにうちの祖父(じい)さんが、郡庁を退職してから暇で仕様がないうちの祖父(じい)さんが、毎日、安城という東海道線の駅へ行って、そこで時計を合わせて帰って来るんですよ。どうい

ことかと言うと、正午の三十秒前になると全部の連絡の電信線がつながれて、ジャーンってベルが鳴るんですよ。

それがパツと終るのが正十二時。その頃はどこにも標準時を示すものがなかったもので、よく暮らして行けたと思うのですが(笑)、毎日駅へ時間を合わせに行くのにくっついて行ったものだから、時計を合わせることが一つの趣味になってしまった(笑)。中学校へ入って時計を買ってもらったら、これをどうやって合わせようかってことばかり考えて(笑)。あれは元町の何丁目だったか、クロノメーターといって船で使う時計がショーウィンドウに置いてあって、そこによく時計を合わせに行きましたね。ところが当時、夜の九時半になると銚子で時報を打っていた。それに時計を合わせたくて無線を始めたということなんですよ。

——一中時代から無線を通じて電機に親しまれて来られたわけですね。

井深 ええ、そうです。中学時代はそればかりやっていましたからね(笑)。

その頃は、おおっぴらにやると怒られますので、夜になるとアンテナを立てて、昼間は降ろしていた(笑)。

神戸海洋气象台がその頃から電波を出していて、午後三時半と九時半になると、船へ海洋気象通報をトンツでやるもので、それを聞くのは訳ないんですよ。大体ラジオなんてなかったんですよ。神戸新聞が一週間ほどの試験放送をやって、そのあと、大正十一年に朝日新聞が一月ぐらいやりました。これは本格的な放送でしたが一月でパツタリやめた。悲しかったなあ、あのときは(笑)。そういう時代だったんですよ。

モダンな雰囲気を楽しんだ元町散策

——昭和二年に一中を卒業されますが、その当時から現在までおつき合ひのある方といえますよ。

井深 そうですねえ、平木徳男さんといって、芦有開発株式会社社長なんですけど、東京へ来ると、息子の家が

二軒もあるのに、うちにしか泊らない(笑)。古いつき合いの人は、あんまり居ないですね。東京の会には時々出ますけれどね。俳優の山村聡なんかも一緒ですね。彼も諏訪山の遊園地の入口に住んでいました。

——当時、町の中も大分お歩きになったでしょうね。

井深 よく歩き回りましたね。屢々行ったのが武徳殿。そこにテニスコートがあり、よくテニスをやりました。選手には、ちよっとなり切らなかつたけれど(笑)。ボール拾いぐらいやりましたよ。北野はスカットとしてとても綺麗だった。人通りもあまりなくて、外人の邸がずつと並んでいてね。トアホテルもありました。異国的で、なかなか風情のある面白いところでした。元町も歩き回りました。新開地へ行くと怒られるんですよ。停学か何かになるのじゃなかつたかな。元町は何となく面白かつたですね。昔からモダンな雰囲気をもっていますね。楠公さん(湊川神社)あたりまでは、よく散歩に行きましたよ。元町をずつと歩くというのは、屢々だったですね。三宮神社あたりは繁華街で、元町とはつながっていませんでした。その頃、ビルディングといったら明海ビル、あれ一つしかなかつたですね。

——お話を伺っていますと、当時の一中は割とおおらかな感じのように思えるのですが。

井深 いや、そうでもなかつたですよ。家の傍で下駄をはいて洋服を着て立っていたら、新聞配達が来て怒るんですよ。お前、ゲートルを巻いてないとダメじゃないか。その新聞配達は神戸一中の上級生なんです(笑)。昼食時は運動場で立って弁当を食べましたしね。厳しか

つたけれど人望のあった人が代々神戸一中の校長だったですね。

——神戸一中の集いが東京で行われるときは、やはり顔を出されておられるんですか。

井深 ええ、私は二十八回の卒業なんです(笑)。一年遅れてしまったので二十七回にもちよっと関係しているんです。二十八回の方は、二月に一回は必ず集っていますね。仲々でられないんですが、思い出すと神戸一中出身者には面白い人が多いですね。

——神戸一中を卒業されてから、早稲田第一高等学院理科、早稲田大学理工学部電気工学科へ進まれますね。

井深 大学へ入ってから神戸へは帰って来ていました(笑)。母が昭和十五年に神戸で亡くなりまして、それ以降、それを思い出すのが嫌で、昭和三十年頃まで大阪までは行っても神戸へは一度も行かなかつたですよ。三十九年か、自動車で昔知っていたところを走って、大変懐しかったですよ。

——それ以降も神戸へは余り……。

井深 余り行く用がないんです(笑)。商売で三宮へ行くぐらいで、親戚もいせんので、行ってもホテルへ泊るぐらいですね。

——神戸一中時代の同窓の方が神戸にいらつしやるということは。

井深 平木さんがいるので、行けば集めてくれますが、時間がないもんでなかなか……。東京で集まることの方が多いですね。

——神戸はやはり少年時代の個性を育んだ場所ですね。

井深 ええ、懐しいですね。本当に懐しい……。

——ポートアイランドが出来てから、神戸も何か別物になったような感じですね。三宮あたりへ行っても昔の面影が全然ないからねえ。

——神戸は港町ですが、船についての思い出は何か。

井深 船はないですね。ただ須磨に山下汽船の水泳場があったので、小学校五年のときに初めてそこで水泳を覚





えました。神戸一中の水泳場が敏馬にあったのですが、当時はどこでも泳げましたよ。その頃、舞子あたりへ行くと、大きな鯛が何十匹ととれましたね。とにかく海岸線で泳げないというところがなかったのじゃないですか。神戸製鋼所は、その頃から敏馬にあったんですが。

私は歩くことが得意だったものですから、六甲山とか有馬の山は全部歩きました。一中に遠足部というものがあつたんです。今というワンダーフォーゲル部ですね。

六甲山へはスケートをやりに、しょっちゅう行きました。池に天然の氷が張るんです。阪急六甲駅からゴルフ場あたりまで歩いて行くんですよ。登ってみて、今日はダメですと言われたら、そのまま山を下りた(笑)。事前に聞く方法がないんですよ。全部天然の氷ですからね。

## 二十一世紀には“心”のある人間が賞ばれる

井深名誉会長は、昭和四十四年に『文芸春秋』に「ゼロ歳教育のすすめ」を書かれ、それ以降、「幼稚園では遅すぎる」「0歳からの母親作戦」「あと半分の教育」などを出版され、財団法人幼児開発協会理事長を四十四年からつとめておられます。二十年この方、幼児教育に熱心に取り組まれておられ、これからは創造性のある人づくりが大切だとおっしゃっておられますね。

井深 二百年来、幼児教育というと、頭のいい子供を育てることが目的だったんですね。私がいまゼロ歳というのは、それとは全然意味が違ふんです。頭のいい子を育てる前に、もっとやらなければならんことがある。それは、りっぱな人間をこしらえることですね。最早、頭が

いいということだけではどうにもならない。ところが今の教育は、知識とか道理の追求を明治維新からずつとやって来た。そこに日本の教育の誤りがあつたわけですね。りっぱな人間づくりを最初からやらないといけない。知育も早くからやった方がいいけれど、もっと先に体育と徳育というものをやらないといけない。この体育と徳育が人間づくりになるのであって、それはゼロ歳から始めなければダメだということです。

だからこの頃、学校に入ってから、の鞭や校内暴力、いじめが問題になっていますが、就学の歳になって大騒ぎをして、学校が悪いとか言っても始まらないんで、子供が生まれる前からお母さんがそのつもりになってかかって行かないとダメですということなんです。

これだけコンピュータが普及し、ロボットを自由自在に使えるようになると、二十一世紀になって人間に期待されるものは、これまでと全然違ったものになる。そのとき何が一番重要かと言ったら、やはり、あつたかい心をもって相談相手になってくれるような、そういう人間が貴重なものになって来ます。理屈ではなく、そういう心を育てるにはどうしたらいいか、それには言葉というものが定着してしまつた年齢では、もう手遅れで、言葉を感じる前にやらないといけないことがある。それは、身体をつくるのももちろんだけれど、徳育といったことを理屈ではなしに身につけてもらおうという、こういうことなんです。

徳育というのは文明というよりも、むしろ文化の範ちゅうに入るべきものです。

井深 これまでには物質文明の追求ばかりなんです。明治に日本を開いたときに、ヨーロッパの文明とものすごくギャップがあるので、日本はこれに追いつかないといけないということで、明治以来の教育体制が始まつたわけです。戦後も日本は焼け野原になつたので経済的、物質的に豊かな国にしないといけないということだけが、この四十年間ずつと言われて来たわけですね。

あたたかい心をもった人間とか、他人のことを考えられる人間ということは、全然どこにも出て来ないわけですよ。だから教育基本法には、人間そのものについては何も出て来ない。家庭についても、国をどう考えるかについても一つも出て来ない。これはとんでもない間違いです。理づめでもって、理屈でもって、論理でもって鍛えられて、教えられて、それしか考えて来なかった。そうじゃないものが今こそ必要なんですよ。

### 神戸にも「右脳」的発想が必要

——よく左脳と右脳との違いということが言われますね  
井深 そう、それなんです。左脳は、理屈、知識、言葉といったものを司っているのですが、右脳は、言葉で表現できない創造性、運動能力、芸術心、直観力、想像力を司っている。日本は左脳の教育ばかりしかして来なかったんです。左脳が強くなると右脳は勝てないんですよ。初めは左脳も右脳も同じようなコンディションなんです。ところが言葉覚えて来ると、だんだんと左脳が達者になっちゃって、理屈っぽくなって来るわけです。そうすると右脳は「お前、黙っておれ」と言われちゃうわけです。そうなる前に音楽であるとか、芸術であるとか、体育であるとか、宗教であるとか、想像力であるとか、第六感であるとか、これらを養うことを生まれる前からやって行こうじゃありませんか、というのが私の持論なんです。

——二十一世紀になれば、右脳の方が大事になるというお話ですね。

井深 そうなんです。二十一世紀は右脳が貴ばれる世の中になるに違いありません。左脳はコンピュータで完全に置きかえられますからね。右脳なくして左脳ばかり進んだら、これは気狂いみたいな存在にしかありません。

——中曽根総理から「文化と教育に関する懇談会」の座長も仰せつかったいらっしやいます。そこでもそういう意見。

井深 そう主張申しあげたけれど、文部省では人間を測る基準を設定することはタブーなんです。だからこういう考えは受け入れられない。臨教審でもこういう要素は入って来ないですよ。

——社団法人発明協会会長もされておられますね。

井深 本当の発明とは左脳からは出て来ません。もうちょっと右脳を大切に育てないと嘘だと思っんですよ。

——梓にはまったくような発明は発明じゃないですよ。とんでもない夢的なものの中から本当の発明が出て来ると考えなければいけない。本当の発明は理づめの延長上に出て来るとは有り得ないということですね。

——湯川博士の発想も西田哲学によるところが大きいという話もありますね。

井深 そうですよ。物理でも化学でも、今や哲学であり、宗教であり、まさしく右脳の領域なんです。左脳で頂上まで行けると思っていたところに大間違いがあるんですよ。

——神戸でも端的にそういうことが出て来ています、町としてはファッションとかコンベンションとかの方向を大事にして、町づくりを進めて行こうという方向をとって来ております。

井深 たとえば元町にしても一風変わったフィーリングとあったものをずっと蓄積して来たと言えるでしょうね。

——神戸はある意味で勝負をするという時代になって来つつあるといえると思うのです。昨年はユニバーシアード神戸大会をやり、そのあと国際スポーツ都市宣言もしています。こういった最近の神戸をどうぞご覧になっておられますでしょうか。

井深 最近では神戸に余り接していませんが、確かにセンスのある町ですね。ポートピア神戸博には行きましたが、ポートアイランドには度胆を抜かれましたね。何かちょっと一風変わった感覚的なものが神戸にはあります。それを生かした町づくりが必要でしょうね。